

〈版一現出〉 もう一つの世界に回り込んで

僕は時より版画の制作を行う。

版画とりわけモノタイプは「絵画の位置、絵画・像の現われる場」について考える契機としてとても示唆的である。

〈像〉は僕らが生きる現実の世界に存在するのだが、もう一方の精神だけの世界の表象としてその二つの世界の間領域の合間に現出を果たすのだと思う。絵画はそのアイデア界を表象することを使命として像を結ぶと僕は考える。

原型・版が転写され像を現わすシミュラクルとも言えるこの版構造は、〈像と実体との相関〉として「ヴェロニカ伝説」や十字架に処せられたイエスの遺体を包んだ布にはイエスの姿が浮かび上がっているとされる「トリノの聖骸布」を強く思い起こさせる。布の表に浮かび上がっているのは布の背後のイエスであり刻印されたということなのだ。

絵とは 背後のあり様を膜上にかたちを現すのであり、背後からの圧によってかたちを結ぶのだ。そう考えた時、モノタイプは正にその筆跡の圧そのものが刻印される。ならば版の表側で行為として残される筆跡は、実は画面の背後での行為であるようにも思えてくるのである。

制作に際しては、アルミ板の背後、あちらの世界に回り込み、像の浮かび上ることを強く思いながら描画は進められた。

2015年9月（制作ノートより）

母袋 俊也